た雄を中心とした大きな順位変動と関係していたと推測される。

## 岡山県北部に生息するニホンザル3集団における個体関係の調査
### ——優劣・順位の形成過程を中心に——

渡辺　義雄（美作女子大学）
今川　真治（阪大・人間科学）

本年度は，主に岡山県真庭郡勝山町に生息するニホンザル餌付け集団において，生後3ヶ月までの新生体の母子関係と準成体雄・成体雄の行動を観察した。

出産直後の母子関係を見ると，高順位の母子の方が腹側位で接触していることが少なく，子ザルに対する母親からの罰的行動も多かった。また，給餌場面においても，，高順位の母ザルの方が子ザルをかなり早い時期から，引き離そうとする傾向がみられた。ところが，生後4～5カ月になると，中・低順位の子ザルの方が高順位の子ザルよりも早く，母親以外の個体と伴食するようになった。

準成体雄・生成雄の個体関係では，季節にかわりなく，成体雄の優劣順位とその雄に対する成体雄の相手個体数との間には相関がみられた。これは，中心部と周辺部の区別が明確であることを表している。また，集団の周辺部にいる準成体雄の個体関係は中心部指向のものと周辺部指向のものとに2分化することが考えられた。成体雄に限ってみると，優劣順位と成体雄の接触個体数の間の関係は，非交尾期には有意な正の相関がみられたが，交尾期には相関がみられなかった。また，交尾期に，成体雌から毛づくろいを受ける量は順位の低い若い雄が第1位雄と同じ位多かった。成体雄の交尾関係に掛ける時間は優劣順位だけでは決まらないことが考えられた。一方，高順位雌の期近接個体数は，非交尾期も交尾期も第1位の雄が圧倒的に多かった。このように優位な雄と高順位の雌との連合から，雄と雌は相互に地位の安定という利益を得ていると考えられる。

以上の観察に加えて，岡山県高梁市臥牛山に生息するニホンザル餌付け集団で成体雄の観察を行った。その結果，季節にかかわらず中心部と周辺部の区別が明確であること，成体雄の間では交尾関係に掛ける時間には優劣順位による差がないことなどが勝山集団での観察と一致すると思われた。

## 出産の有無を考慮した優劣順位に伴う採食量の研究

横田　直人・長岡　壽和（大分短大・園芸）

ニホンザルの夜間における食物摂取の調査は少ない。これまで高崎山に生息するニホンザルについて1987年からB群の経産メスを対象に一日の食物摂取，摂取エネルギーおよび採食行動を主とする行動の時間的な割合を検討しているが，本年はさらに出産個体，経産メスのうち出産にいたらなかった個体（非出産個体）の夜間帯における行動に限定して調査をおこなった。出産個体は妊娠・授乳および離乳の各期間において食物摂取量，栄養所要量および採食時間を明らかにすることを目的としている。

妊娠期間にあたる1989年4月29日，5月3，4，5日の夜間（18時00分～翌朝6時30分）に4個体を対象に連続追跡法でおこなった。この時季の日の出は5時28分～22分で，日の入りは18時54～59分であった。各個体の行動は秒単位の時間を記録した。夜間中，個体の近くに照明をあて観察した。

夜間の総観察時間は740.7分／日で，採食には3.0%，食物探索は0.3%の時間を費やしていた。夜間の大半は睡眠に当て84.4%で，残り休息は，6.9%，移動（歩行，走行）は2.9%，毛づくろいは2.4%，木ゆすり行動は0.02%であった。日の入り前後の1.3時間においては，採食が25.4%で全体の¼を，食物探索が3.1%を占めた。残り休息には52.6%，移動は18.7%，木ゆすり行動には0.2%を占めた。また日の出前後の2.4時間においては，採食が全体の1.4%と低く，辺りが明るくなっても睡眠が92.1%と高い割合を占めた。残り移動が4.8%，毛づくろいが0.8%，休息が0.9%であった。この時季の高崎山のニホンザルは，夕方暗くなってからも食物探索および採食をおこなっているのに対し，明け方明るくなっても大半は睡眠にその時間を費やし，採食に費やす時間はわずかであった。

高崎山のニホンザルの夜間の行動を観察できることがわかったので，今後も継続調査をおこなう。